
とある悲しみ

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある悲しみ

【Nコード】
N95540

【作者名】
日頃寝 ハル

【あらすじ】
誰かを失うより、その人を忘れてしまう方が、私は怖い。どこにでもある不幸です。彼女は電車に乗っています。

おかしいな。あなたの顔が思い出せない。
思い出せるのは写真の中の笑顔だけ。

どんなに辛いことがあっても人間は生きなきゃいけないんだなあ
最近、気づいた。

どんなに傷ついてても、苦しくてても、命が続く限り、生きなきゃい
けないんだなあ。

私がどんなに死にたいと思っても心臓は意思に反して動き続けるし、
お腹は勝手に減るし、泣きつかれたら寝ちゃうし。

もう死のう！そう考えた夜が何度あったことが。
そう思っても、次の日の朝日を私は見る。

電車の中で、おばあさんが席を譲られている。
幸せそうに手をつないでるカップルがいる。
熱心に本を読んでいるサラリーマンいる。

世界には生きている人がたくさんいる。

幸福な人もたくさんいる。

私は毎日電車で揺られて会社に行くけど、目に映る人の誰もがきつ
と私より幸福だ。

つり革につかまって外を見ると洗濯物を干すお母さんがいる。
自転車で競争をしている中学生がいる。
犬の散歩をしているおじいさんがいる。

私は思わずタメ息を吐いた。
座っていたおじさんが私の顔を迷惑そうに見上げた。

最近、嫌な夢を見なくなった。

きっとあの人がいない世界に慣れてしまったからだ。
起きたとき涙で目やにが張り付いて、目が開けられなくなるなんて
こともなくなった。

きつとあの人が私の中で薄れてしまったからだ。

もう最悪だ。自分が嫌になる。

絶対に忘れたくないと思ったのに。

絶対に自分だけは覚えていようと思ったのに。

あの人がいなくなって私の時間は完全に止まったと思ったのに。

時間が、私の生活の間に流れる時間が、私とあの人を隔ててしまっ
た。

あの人の声が耳に残っている。

いいや、想像だ。あの人の声はもうどこにもないのだから。

あの人の顔は目に焼きついた。

もう写真の中の顔しか思い出せない。二人で撮った写真は本当に少

ないのに。

あの人の匂い。仕草。全部もうどこにもない。

人は死んだらメディアの中しか、残らない。

「あなた、大丈夫？」

隣に立っていたおばさんが言った。

気づかないうちに私の頬は濡れていた。

「ああ、大丈夫です。大丈夫……」

私は慌てて頬をスーツの袖で拭った。

大丈夫。まだ大丈夫。

一番怖いのは。

あの人の事を忘れて涙が出なくなることだ。

私は生きている。たぶんこれから先もずっと。

生きたくなくても、心臓は勝手に動く。

それって、誰かが私に生きろって言ってるんじゃないかな。

例えばそれがあの人だったらいいなって思っ

私はまた一滴こぼした。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
たくさん写真を撮るのは良いことです。
忘れちゃっから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9554o/>

とある悲しみ

2011年10月8日01時13分発行